

岡崎市議会議長 様

支出番号

7

会派名

自民清風会

代表者名

築瀬 太



下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政務活動旅行報告書

平成 30年 3月 19日提出

| | | |
|------------------|--------------------------------------|--------------------------|
| 活動年月日 | 平成 29年 7月 11日 (火) ~平成 29年 7月 13日 (木) | |
| 氏名 | 山崎憲伸 加藤義幸 内田 実 小木曾智洋 鈴木静男 杉浦久直 | |
| 用務先 及び 内 容 | 1 | 用務先 福井県 あわら市 |
| | 7月11日 | 内 容 芦原温泉駅周辺整備計画について |
| | 2 | 用務先 石川県 輪島市 |
| | 7月12日 | 内 容 回遊性とにぎわいのあるまちづくりについて |
| | 3 | 用務先 石川県 七尾市 |
| | 7月13日 | 内 容 土地再生整備計画事業について |
| | 4 | 用務先 |
| | 月 日 | 内 容 |
| 備 考 | | |



政策調査報告書

報告者：小木曾 智洋

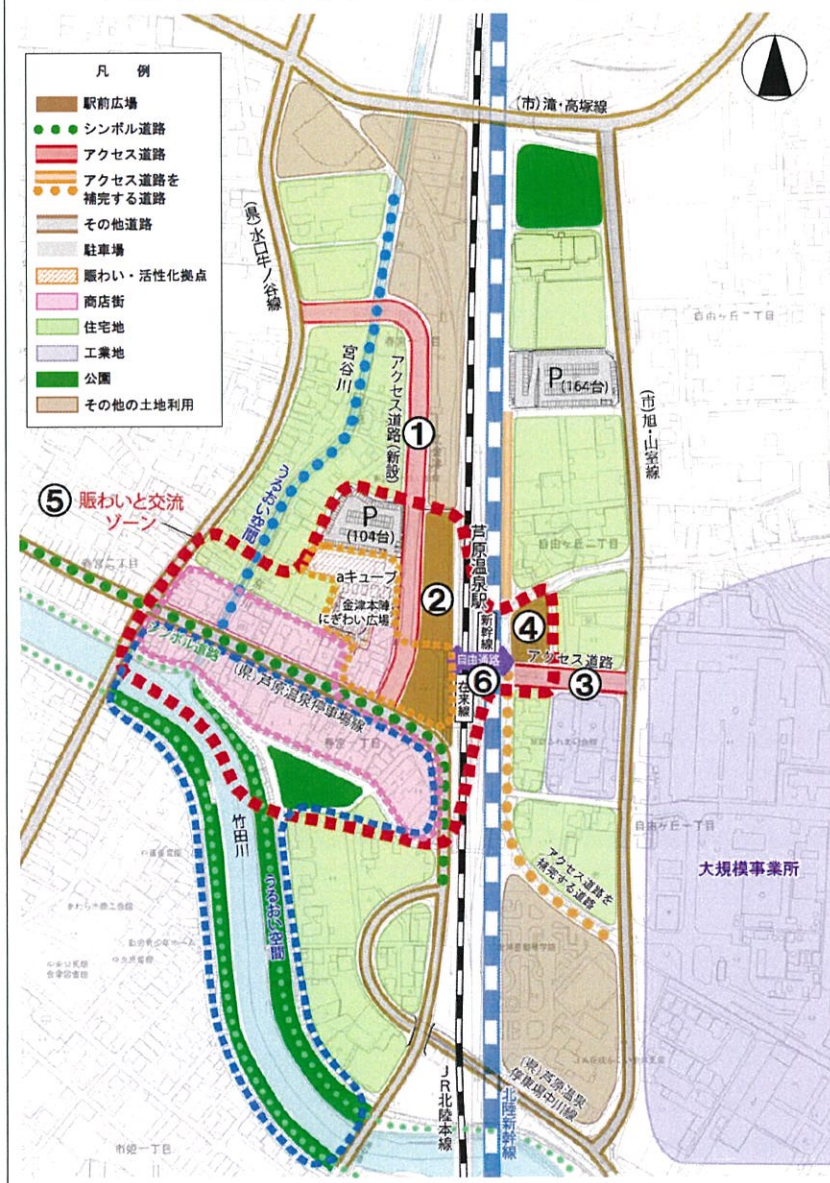
| | |
|------|-------------------------------------|
| 視察日 | 平成 29 年 7 月 11 日 (火) |
| 視察内容 | 福井県あわら市 芦原温泉駅周辺整備計画について |
| 視察者 | 山崎 憲伸、加藤 義幸、内田 実、鈴木 静男、杉浦 久直、小木曾 智洋 |

【事業概要】

○芦原温泉駅周辺整備基本計画【改定】

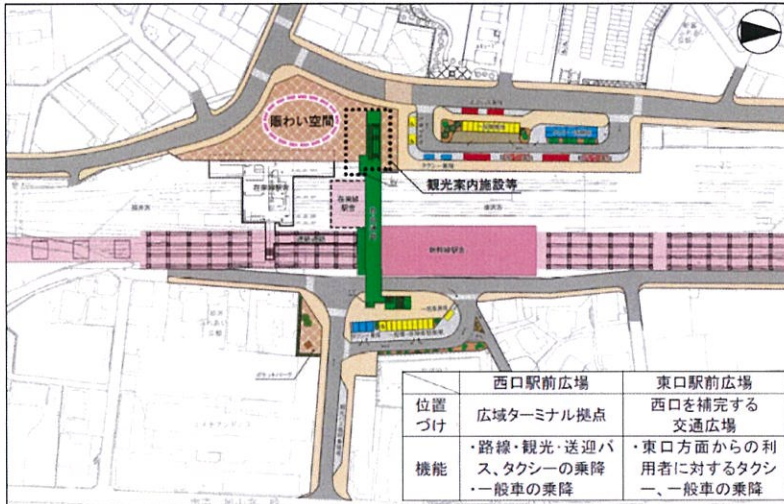
芦原温泉駅周辺整備計画とは、平成 34 年度末の北陸新幹線金沢-敦賀間開業と、新幹線新駅の設置に向けて、あわら市と福井県を始めとする周辺自治体が一丸となり、様々な取組の中核となるあわら市による「芦原温泉駅周辺整備基本計画」である。本計画は、平成 18 年 3 月に策定され、各種事業を進めてきたところであるが、新幹線計画の具体化、時間経過に伴う交通条件の変化、地域ブランド創出事業等、あわら市に置ける新たな取組等を背景に、平成 29 年 3 月に改訂された。

◆駅周辺施設の位置・規模及び整備イメージ◆

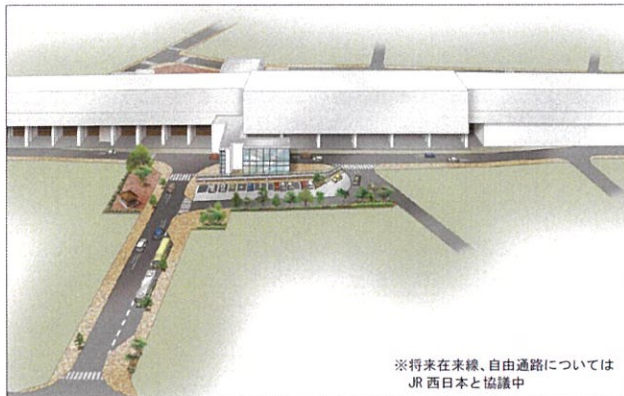


- ① 西口アクセス道路
主要観光地であるあわら温泉街方面との連絡を考慮
- ② 西口広場
現在の市営駐車場を活用した区域。公共交通や送迎の乗降機能を配置。
- ③ 東口アクセス道路
新幹線口と市道を結ぶルート
- ④ 東口広場
- ⑤ 賑わいと交流ゾーン
広域的な賑い、交流拠点である西口を中心とした駅直近部であり以下の各エリアの特性に応じた賑い、交流の創出を目的とする。
 - ・交流拠点エリア
 - ・駅前商店街エリア
 - ・うるおいエリア
- ⑥ 駅舎及び東西自由通路
新幹線駅舎は現駅舎の北側、在来線駅舎の橋上移設は現在 JR と協議中。

◆ 西口及び東口駅前広場のレイアウト(案) ◆



◆ 駅東口の将来イメージ ◆



◆ 駅西口の将来イメージ ◆



○ 芦原温泉駅周辺賑い創出事業

平成 35 年春の北陸新幹線の延伸を控え、観光地としての知名度と魅力の向上はもとより、その効果を最大限に活かした地域経済好循環を実現する仕組みづくりや市民に愛され、市内外の人が訪れたいような芦原温泉駅周辺の整備が急務となっている。

まず、芦原温泉駅周辺のまちづくりの方向を示すため、地域ブランドのコンセプト「都会にはない贅沢があるまち」を基に将来デザインを描くことを決定。この将来デザインは、市内全世帯、全小・中・高校生、企業、市外者等を対象とする「あわらの未来づくりアンケート」や「市民ワークショップ」の他、地域ブランド戦略会議直属の専門部会「芦原温泉駅まちづくりデザイン部会」による検討を重ね、全国的に有名な3組のデザイナーに市民の声を広く反映するものとして描いてもらい、エリアごとに10点以上作成し、デザイナー3組による公開プレゼンテーションを経て市民投票により最終5点の将来デザインが採用された。

今後は採用された将来デザインに込められた理念を踏まえ、芦原温泉駅周辺のまちづくりが進められる。



市民投票による最終5点の将来デザイン(市役所玄関ホールに掲示)

芦原温泉駅周辺賑い創出事業の体制としては、H28.5 に設立された市長を会長とし、産官学金労の関係者による委員より構成される「あわら市地域ブランド戦略会議」があり、賑い創出事業を推進する最高意思決定機関である。この戦略会議にまちづくりプランを提言する「芦原温泉駅周辺賑い創出協議会」と、地域ブランドの確立と情報の発信に関する検討機関として「ブランド専門部会」がある。この協議会は、学識経験者や、地元商工団体、都市計画審議会、観光協会、金融機関、地元町内会の区長等幅広い人員により構成されている。この協議会のアドバイザー的な立場で、あわら市による、駅前賑い空間の整備方針に関する検討機関としての「庁内検討会議」や、新幹線開業に向けた機運の高揚を図る市民ワークショップの実施機関である「芦原温泉駅まちづくりデザイン部会」がある。又、都市景観形成の為に規制に関する法定協議会としての「景観まちづくり協議会」も合わせ、事業推進の体制を取っている。尚、駅周辺賑い創出の実行部隊としての「(仮)まちづくり会社」の設立を H30 を目標に目指している。

H28 年度に作成された芦原温泉駅周辺将来デザインの具現化に向け、平成 30 年 3 月を目標に「芦原温泉駅周辺まちづくりプラン」を策定する。プランの策定に当たっては、芦原温泉駅周辺地区の現況の課題整理を行うと共に、市民や観光客の顧客動向やニーズ等を把握することにより、エリアごとに活性化に資する為に、どのような地区機能が求められているかを調査し、その分析結果を反映する。又、まちづくりデザイン部会を中心にワークショップを開催する等、新幹線開業に向けた市民の機運の高揚を図っている。



【所感・岡崎市への反映】

本事業は現段階においては、芦原温泉駅周辺整備は都市計画決定の手続き段階であり、又、賑い創出事業もまちづくりプラン策定の為の調査段階であり、今後の本事業の行方は不透明な部分もある。本事業は、北陸新幹線の金沢-敦賀間の延伸による新駅設置と云う大きな転換点を機運とし、計画されたものであることは明らかであるが、新幹線隣接新駅に加賀温泉駅もあり、これとどの様に連携していくのか、或いは差別化を図り優位性を目指していくのか、新幹線開業に向けた今後の課題も残っていると考えられる。

岡崎市においても JR 岡崎駅前については、土地区画整理事業や、シビックコア地区交流拠点整備事業により、又、名鉄東岡崎駅周辺については、東岡崎駅周辺地区整備、北東街区有効活用事業等、あわら市に置ける事業と近似する事業が今まさに進められている。行政の関わり方についても、あわら市と大きな差異は見られないが、市民投票による将来デザインを決定し、その理念を踏まえたまちづくりプランの策定手法は、本市にとっても非常に参考になる。

現状、本市には新幹線新駅設置といった大きな機運をもたらす転換点となり得る大事業は、国県

に於いても計画されていないが、愛知環状鉄道の複線化に伴う中岡崎駅と岡崎公園前駅の総合駅化や、JR 岡崎駅と名鉄東岡崎駅を結ぶ軌道交通路の整備と云った様な、賑い創出を目的としたハード整備としての大きなきっかけづくりとなり得る事業を新規に考えてみる事も必要ではないかと考える。又、賑い創出の為には、ハード整備のみに頼らず、規制緩和、或いは、規制の網を掛けることや、如何に市民を巻き込み、民間主導で事業推進を図るのかと云ったソフト面の整備も重要である。

【同行者の所感】

- 平成 34 年度の北陸新幹線金沢-敦賀間開業に向け、東西駅前広場、東西アクセス道路等の整備を今後行っていく事業だが、イメージ図と整備方針概要は示されているが、どのような機能をもたすかは、今後の市民との話し合いにより、決定していくとの事。

出来る限り市民の要望を聞き入れた形での整備は、大変良いと思った。

一方で地権者の要望も聞かなければ、この整備は進まないと思うが、地権者も少なくまとまっております。関係協議会にも参加しており、要望を聞き入れた形での整備が進むようだ。

全く白紙のような状態で、市民が青写真をつくっていくことは、大変素晴らしいと思った。

本市は、新幹線駅の誘致は難しいが、リニア開業時に向けた地域魅力の発掘、向上に努めたい。

- 説明の中で地域ブランド創出事業の説明があり、地域ブランド名を「あわらせいたく」とし、その商品選定のための基準を設けるための専門部会を民間と共同して立ち上げ、基準を決定したとのことである。

岡崎市においても岡崎ブランド品の選定の為の基準を設ける必要性があると感じた。

- 平成 35 年春の北陸新幹線の開業に向け、観光地の知名度と魅力の向上や地域経済の好循環を実現するため、芦原温泉駅周辺の整備に取り組んでいる。

この整備の方向性を示すため「都会にはない贅沢があるまち」をコンセプトに、市民各層や企業に対しアンケート、ワークショップを実施し、デザイナーによる提案を市民投票により将来デザインの採用を決定した。市民総参加の事業とするため市民意識の高揚が図られている。

- 平成 34 年度末の北陸新幹線開通であることから、これを契機に芦原温泉駅周辺整備計画を一丸となって取り組んでいる。

今後は議会説明や市民報告会を行い市民全体の理解を得た事業となるよう事業推進を行うとのことで見守りたい。

まちづくりデザイン部会、ブランド専門部会、創出協議会などしっかりとした体制のもと進めていることは、参考とするべきである。

- 北陸新幹線の金沢から敦賀間の延伸が平成 34 年度末と約 6 年後に控える中、新幹線芦原温泉駅の設置に向けた駅周辺整備が進められている。近年減少傾向であったあわら温泉の宿泊客数が、北陸新幹線の金沢延伸によって年間 88 万人へと回復する中、北陸新幹線の新駅に対する期待は高い。あわら市では「ああ、あわら贅沢」というブランドスローガンを掲げ、地域ブランドの確立を進めるとともに、駅西口の周辺整備を進めてきたが、時間の経過、環境の変化に合わせ周辺

整備計画の見直しも行い、著名デザイナー3名による公開プレゼンによる駅周辺将来デザイン市民投票などにより、市民意識の反映と、注目度向上の取り組みを進めている状況である。

一方岡崎市においては、観光産業都市の確立に向け、本市の玄関口である東岡崎駅東改札から北東街区、リバーフロント地区への整備は進められているが、民間事業者が中心の話ではあるが、まだ駅本体、岡ビルの建て替えという課題が残されている。また、JR 岡崎駅では、東口のシビックコア地区の整備が進められているが、駅南土地地区画整理事業の進展、新しい藤田保健衛生大学病院の開院もある中で岡崎駅西口の再整備のニーズも高まっている。また、愛知環状鉄道と名鉄との結節点となる岡崎公園前駅、中岡崎駅も、愛知環状鉄道の利用者増、利便性向上、また観光拠点となる岡崎城への来訪者の今後の増加を考えていく中では、総合駅への整備を考える時を迎えている。

そうした中では、駅周辺整備におけるあわら市の公開プレゼン、投票による市民意識の反映、注目度向上の取り組みは、今後に向け見習うことができる部分であると考え。また、岡崎市でも岡崎ブランドの確立に向けシティプロモーションを進める中で、「岡崎ルネサンス」のシンボルマークを利用しているが、公募や投票などのプロセスを経て登場したものではなく、市民の認知度も高いとは言えないように感じる。

今後の本市の観光産業都市への成長に向けては、海外を含む広域からの交通利便性の向上にむけたさらなる取り組みが必要であるし、シティプロモーション施策との両輪で行っていくべき課題も多い。新たな産業の柱を立てる本市の息の長い取り組みをしっかりと注視していきたい。

政策調査報告書

報告者：杉浦 久直

| | |
|---------|-------------------------------|
| 視 察 日 | 平成29年7月12日(水) |
| 視 察 内 容 | 回遊性と賑わいのあるまちづくりについて |
| 視 察 者 | 山崎憲伸、加藤義幸、内田実、小木曾智洋、鈴木静男、杉浦久直 |

<輪島市の概要>

石川県の北部、能登半島の北西端に位置し日本海に臨む。80キロに及ぶ海岸線は能登半島国定公園に指定され、古くから栄えた港は、北前船の寄港地でもあった。平成15年には能登空港が開港し、客船が寄港できるマリンタウンの整備などが進んだ。豊富な魚介類と輪島塗、朝市などの伝統的な観光資源にも恵まれた観光都市である。

面積 423.51k㎡ 人口 99,703人(平成27年10月1日現在)



<周遊できるまちづくりをめざして>

輪島市は古くから観光産業で栄えたまちであったが、朝市の観光地化が進む中で、他の産地の産物を仕入れて販売しているなどの苦情も増え、ピークには200万人を超えていた観光入込客数が一時100万人を切った。2001年には65年間利用されていた鉄道線も廃線となり、市民の危機感が顕在化していた。そうした中、石川県が廃線となる輪島駅から市街地へ向けての通りを都市ルネッサンス事業として道路の拡幅による再整備を進めた。

<都市ルネッサンス事業>

平成8年度からの県による都市ルネッサンス事業、都市計画道路河井町・横地線の拡幅は、整備前、車道片側2,750mm、路肩750mm、側溝500mmであったものを、車道片側3,000mm、停車帯1500mm、歩道2500mmへと拡幅するとともに、整備に伴う移転、再築の際、民有空間をさらに1,000mmセットバックするという住民との協定を結び、歩行者空間を計3,500mm確保するなど、住民主体の景観などに関するルール作り(輪島まちづくり協定)を通じ、美観化を推進していった。

<ふらっと訪夢>

平成13年3月に廃線となった鉄道駅をまちづくり総合支援事業によりバスの発着場や道の駅として整備を行った。ふらっと訪夢という名前には、「人の心も街のづくりもバリアフリーのフラットな街でありたい」という思いと、「鉄道駅であった名残をあらわすプラットホーム」、そして「ふらりと訪れ小さな夢を見つけて頂く」という意味が込められている。

<本町・朝市通り>

輪島の朝市は平安時代に始まると言われ、今では200~250店舗が年間約335日開催する能登の観光資源となっているものであるが、行われる朝市通りは、整備工事着手前は、路面がつぎはぎだらけであった。まちづくり総合支援事業により、翌朝の朝市に間に合うような施工がされた自然石舗装と電線類の地中化を行い、再び観光地としての魅力を高めていった。

<鳳至上町地区>

平成19年の能登地震の復興と合わせ、古くからの町並みの景観を取り戻そうと、街なみ環境整備事業として通りに面した建物の外観、屋根、看板などの修景に対し補助を行った。参加率9割が目標であったが、98%の協力が得られている。道路の修景も行うことで、「釣りバカ日誌」や「まれ」のロケ地としての活用もなされた。

<マリンタウンプロジェクト>

平成5年から社会資本整備事業として、県と市の共同で総工費90億円をかけ砂浜を埋め港と周辺の整備が行われた。途中でバブルの崩壊により整備期間が延長されたが、平成18年にはホ



テルの開業、平成22年には岸壁の共用とクルーズ客船の寄港開始、27年3月の交流拠点施設のキリコ会館の開館などで整備が完了した。

〔感想・岡崎市への反映〕

・ 鉄道の廃線をマイナスと見ずにその危機感を利用し町おこしの起爆剤にする逆転の発想には感心させられた。また、半分が耕作放棄地で市のお荷物的存在であった千枚田をボランティアやオーナー制を活用し、現在では180名のオーナーを有する観光スポットにし、その他多くの事業もお金をかけずにアイデアで集客を増やしてきた市長の手腕には見習うべきものがあると感じた。

・ 平成17年3月31日、のと鉄道穴水～輪島間が廃線になった。65年間利用されていた鉄道廃止に伴い、地元住民は少なからず危機感をもったようだ。鉄道廃線が新たなまちづくりの起爆剤となったようだ。地域を定めて、道路の美装化・無電柱化・セットバックによる回遊性の確保等、又、キリコ会館の整備等による、魅力発信事業の充実。すべての歯車がうまく廻っているように思う。今後は、観光客の滞在時間の延長等、引き続きの課題解決に向けた、取組みが行なわれるようである。そんな中、現在1つしかないシティホテルが、もう1つのホテル誘致が決まりそうだということは、明るい材料である。

本市においての『観光産業都市岡崎』の創造に欠かせないのがシティホテルの誘致だろう。本市の魅力をいかに発掘し、発信することが重要である。

・ 輪島市はH13年、鉄道路線が廃止される事に危機感を覚え、これを起爆剤に回遊できるまちづくりの為に、輪島駅の跡地を利用したふらっと訪夢、歩行者空間確保のためのセットバックを伴う都市ルネッサンス事業他、朝市通りを始めとする主要な通りの整備を行ってきた。

鉄道廃止に伴いバス路線が整備されたが、元々鉄道は運行本数が少なく、バス路線になり停留所が増えた為、若干の定時制を犠牲に却って市民にとっては利用しやすいものとなった様である。偶々、視察日が数少ない朝市定休日と重なり、ひと通りも少なく賑わいそのものを実感することはできなかったが、朝市通りの整備状況やある程度統一された景観を確認することは出来たし、沿道の店舗経営者に聞くところによると、それなりの人出は有るようである。

岡崎市の旧中心市街地活性化にも、景観に配慮したセットバックを伴う再開発や再整備事業を行うには見習う点も数多くあると考えるが、用地買収を伴う事業に関しては、地権者がどれほどの危機感を現状に対し抱いているかがネックになるものと思われる。輪島市でもそうであったように、民間主導により、危機感を抱く商店街や商工団体からの自発的な行政への働きかけが重要である。

・ 輪島市の年間観光入込客数は約110万人と回復してきているようである。北陸新幹線の金沢延伸と、NHK連続テレビドラマ「まれ」の効果も大きいようではあるが、その「まれ」を呼び込んだのも、様々な景観に配慮したまちづくりの取り組みによるものである。洋風でも和風でもない「輪風」なまちづくりとして、市民主体で輪島まちづくり協定をつくり取り組んできたことが現状に結びついていると言える。まちなかを歩いてみて、様々な景観に対する配慮がされていると感じた。また、夜のキリコ会館外広場での御陣乗太鼓の無料パフォーマンスや、温泉を使った無料の足湯施設など、おもてなしを感じる取り組みが随所に見られ、観光産業が市にしっかり根付いているということを感じた。これからの岡崎市が観光産業都市を目指していく中で、歴史まちづくりや景観への取り組みとともに、おもてなしを感じさせる取り組みをどう作っていくかも大きな課題であると感じた。

・ 能登半島地震、鉄道の廃線及び人口減少の大きな課題が発生し、市民にも大きな危機感をかかえる中、回遊性とにぎわいのあるまちづくりを目指した都心軸整備事業は「ふらっと訪夢」と名付けられた。人の心も街の造りもバイアフリーであり、鉄道駅であった名残を残すプラットホームをふらりと訪れ、小さな夢を見つけてもらうため、輪（島）風の整備が実現できている。大きなピンチをチャンスに変えた事例で素晴らしいと思う。また、白米千枚田を中心とした農業資産が日本初の世界農業遺産に認定された施策も大いに評価されるものである。

・ 輪島の朝市は有名である、観光客もそれを目指して能登へ来ている。しかしながら、朝市を観光後はすぐに他の地域へ行ってしまおうとのことであり、滞在時間や宿泊客が伸びない課題がある。そこで、輪島への観光客の滞在時間を増やし経済効果を上げるために、回遊性と賑わいのあるまちづくりに取り組んでいる。本市も同様の課題があるが、輪島市を参考に歩きやすい道路舗装と電線の地中化は重要と考える。こんご、「QURUWA」事業においても積極的に進めるべきである。

政策調査報告書

報告者：鈴木 静男

| | |
|---------|-------------------------------------|
| 視 察 日 | 平成29年7月13日 (木) |
| 視 察 内 容 | 都市再生整備計画事業について |
| 視 察 者 | 山崎 憲伸、加藤 義幸、内田 実、小木曾 智洋、杉浦 久直、鈴木 静男 |

<七尾市の概要>

石川県北部、能登半島の中央部東側に位置する能登地域の中心都市。2004年10月に七尾市と鹿島郡田鶴浜町・中島町・能登島町が合併し、新「七尾市」が誕生。市の中央には七尾市西湾と七尾市南湾、その北東に能登島がある。その北東に能登島がある。室町期は畠山氏、江戸期は前田氏の城下町。能登観光拠点の和倉温泉がある。



面積：318.32 km²

人口：55,348 人

<まちづくりの経緯>

七尾市は、能登半島観光の宿泊拠点である和倉温泉があり、多くの観光客が来訪する。しかし、中心市街地では、「小丸山城址公園」「山の寺寺院群」「七尾美術館」などの観光資源があるものの点在していることから、滞在時間が短く、また地域商店での消費額が少なく、商店街は年々衰退していた。

そうした中、平成16年より一本杉通り振興会が、幕末から明治にかけて加賀藩領内では花嫁が嫁ぎ先にのれんを持っていく風習を利用し、これらののれんを通りに掲げる「花嫁のれん展」を毎年4月下旬から5月上旬にかけて開催している。平成23年10月には、通年的に観光客を受け入れたいと、振興会が中心となって、空き家を活用した花嫁のれん常設展示場を開設し、年々、観光客や大型バスでの団体客が増えてきた。

しかし、展示規模が小さく、受け入れ態勢が乏しいことから、地域住民より、婚礼時の場面を再現している花嫁のれんの展示、観光資源の情報発信、休憩施設などの機能を併せ持つ中心市街地観光交流センター建設の声があがった。

これを受けて、地元商工会が中心となり、平成27年春の北陸新幹線金沢開業、能越自動車道七尾ICまでの開通などによる交流人口の拡大が整いつつある中、官民一体となって、この施設を核としたまちづくりが必要であると動き出した。

<中心市街地の課題>

- 1、小丸山城、山の寺寺院、七尾美術館などの地域資源が豊富にあるものの点在しており、一体感がふそくしており、それらを繋げ回遊性を高める必要がある。
- 2、空き店舗や空き地が増加し、商店街の活力が低下しており、中心市街地の賑わい再生に向けた魅力向上が必要である。



3、心地よいまちなか観光を演出するための地域住民のおもてなし力の向上や地域資源の魅力再発見が必要である。

<中心市街地の課題解決策>

課題解決に向け都市再生整備計画を活用し目標設定

【大目標】 歴史・文化資産を活用したまちなかの賑わいづくり

目標1 歩く楽しさが体感できる「みち」の演出による交流人口の拡大。

目標2 「アートとのれん」が彩る商店街の賑わいづくりによる集客の向上。

目標3 まちなか地域資源の魅力発見による住民意識の向上。

七尾市中心市街地観光交流センター

都市再生整備計画事業の概要

地区名：七尾市街地西地区

区域面積：80ha

事業期間：平成25年度～平成29年度の5年間

総事業費：10億円（うち国費40%）

事業内容

■基幹事業

- ・道路 2路線
- ・公園 小丸山城址公園 1箇所
- ・地域生活基盤施設 案内看板
- ・高質空間形成施設 市道高質舗装 6路線
- ・高次都市施設 観光交流センター 1棟

□提案事業

- ・地域創造支援事業
- 既設建物解体事業
- ・事業活用調査
- 小丸山城址公園利用検討調査
- 事業評価分析業務
- ・まちづくり推進事業
- まちなか回遊支援社会実験
- ⇒レンタサイクル社会実験

◆効果促進事業

- ・合宿施設整備事業
- ⇒テニスコート整備事業

高質空間形成施設
市道高質舗装（ブロック系舗装）



事業費：501百万円



敷地面積：3,700㎡

施設運営：指定管理者 一般社団法人
七尾家

建物：2棟

花嫁のれん館（左棟）

展示・体験・観光情報・物販

寄合い処みそぎ（右棟）

交流広場・和室

都市再生整備計画を活用し基幹事業である道路・公園・市道高質舗装・観光交流センターなどの事業を進めている。

観光交流センターにおいてはボランティアによるおもてなし館内案内などにより観光情報なども伝えている。



〔感想・岡崎市への反映〕

地域振興・市街地活性化のポイントは地域住民の声や活動が原点でなければならぬという事がこの視察により再確認できた。いわゆる民間主導が元となりその後公民連携へつながることにより公的整備によるインフラや箱物が地域住民の積極的な利用や企画への参加、交流が生まれ、地域以外の方が魅力的で訪れてみたくなるまちと感じた。

これらの点は今後の本市においてのリバーフロント事業に大変参考となり、今後はいかに地域住民や事業関係者が主体となるりうるようリバーフロント地区活用組織や団体の募集や援助を企画する必要がある。

〔同行者の所感〕

- ・町おこしは本来、行政主導ではなく民間主導で行われることが望ましいと考えるが七尾市街地西地区においては、商店街が空き店舗を利用して始めた花嫁のれんの展示が観光客を呼び込みに効果が出て、さらに発展させたいと民間主導で「花嫁のれん館」を中心とした都市再生整備が行われたとのことである。民間が行政を動かした好例であると思われる。
- ・七尾市のまちづくりは、一本杉通り振興会が石川県を中心に北陸地方に古くから伝わる風習である花嫁のれんを、決まった時期に、通りに掲げ始めたことから、常設展示場の開設、観光交流センターのオープン、そして、歴史・文化資産を活用したまちなかのにぎわいづくりの為に都市再生整備計画事業が始まり、H25からH29までが一つの区切りとなっている。七尾市の和倉温泉画始め、多数の歴史文化遺産を多く抱えるが、点在しており、市街地における観光客の滞在時間も短く、商店街が年々衰退していく様子は、岡崎市が抱える問題とあまり変わりがないように思える。観光客の回遊性向上に付いての取組は多くの自治体にて推進されているところであり、岡崎市においても乙川リバーフロント計画における岡崎城総堀周辺をなぞる「QURUWA」戦略としてまちづくり主要回遊動線の整備に取り組んでいるところであり、七尾市の例は大変参考になると考える。公民連携の在り方と、地域住民によるおもてなしの力と、地域資源の魅力再発見が必要である。
- ・都市再生の核として位置づけられたのが、石川、富山両県でえにしより受け継がれてきた『花嫁のれん』である。
テレビドラマでも話題になった『花嫁のれん』。
この事業を推進したことで、昨今使われなくなった古き良き文化である『花嫁のれん』が復活していることはすばらしい一言。
花嫁のれん館の整備をはじめとする街路の美装化等のハード整備。そこを利用した、花嫁のれんに関わる事業の展開等により、観光客の入込みも増加しているようである。今後は、ソフト事業の充実に力をいれて行くとのことであるが、観光客の滞在時間をいかに延ばすことが出来るかが、この事業の評価につながるであろう。
- ・空き店舗や空き地が年々増加し、商店街の活力の低下や人口減少と高齢化が急速に進行している課題を、点在して一体感のない歴史と文化資産を生かして、危機感を持っている商店街のにぎわいづくりに取り組み、小丸山公園、山の寺寺院群などの歴史遺産をつなぐ歴史軸の整備と、生活の営みである文化遺産である花嫁のれんを活用し、集客力の向上を実現している。
- ・七尾市は和倉温泉という年間90万人が宿泊する観光資源以外にも、七尾駅からの都心軸の一端となる年間80万人超が訪れる能登食祭市場が集客を支え、年間の観光入込客数が380万人という観光都市である。それでも、人口減少等により中心市街地の空洞化が進みつつあるなか、さらなる都市軸として歴史軸を整備し、点在するその他の観光資源をつなぎ、地域商店での消費拡大、中心市街地商店街の活性化を目指し都市再生整備計画が進められている。そうして整備された一つが観光交流センター「花嫁のれん館」であるが、年間入館者が24,000人と少し寂しいと感じる数字である。施設や展示、案内ボランティアなどに不満な部分はないが、駅前や食祭市場から商店街を通過するという動線が、道路舗装の美装化などがされているが、その距離を歩いてみたいと感じさせる魅力が乏しいように感じた。これは、前日の視察先の輪島市を先に歩いたこととの比較

であり、たまたまその日感じた印象ではあるかもしれないが、自動車と歩行者の分離の部分や、もう少し歩行者が歩いてみたいと感じさせる雑多な賑わい、路地や商店の連続性が乏しいように感じてしまった。

これを岡崎市に当てはめていくと、リバーフロント計画、人道橋の整備が進んでいく中で、どう雑多な賑わいをもたせていくか、人の流れを車道で分断しないかが今後の重要な課題であると感じた。